

天眼鏡

ヤギのレンタルも事業化する産直市場

西東京市に筆者は住むが、月に1回は長野県伊那市に足を運ぶ。家内が伊那市高遠町の出身であるとともに、たまたま縁があって伊那市にあるNPO法人の役員や地域活性化プロジェクトのメンバーをつとめており、これらの仕事で出かけることも多く、夜は実家に泊まる。家内の母親は95歳ながら元気で、親孝行を兼ねることができる。

こうして伊那市に出かけるたびに必ず立ち寄るのが、同市ますみが丘にある産直市場グリーンファームである。グリーンファームは知る人ぞ知る産直市場で、直接的なねらいは、ここに地域特産品として並べられているイナゴの甘露煮を購入するためである。イナゴの甘露煮が好物で、殻付きの落花生とともにビールのつまみに欠かすことができない。そのグリーンファームは出荷者2000名超で、新規就農者を含めた小規模・家族経営にとって貴重な販売の場となっている。地元で生産された米・野菜・果実・花卉・地域特産品、生活用品・雑貨、さらには骨とう品・古道具まで並べられている。地域特産品では、蜂の子やザザムシ、イナゴの甘露煮も含めた珍味、またカワラダケやさまぎまの薬草等の漢方薬の原料も多い。さらには秋になると松茸は勿論のこと、それこそ様々な種類のキノコが並べられ、これを求める人たちが長蛇の列をなす。こうしたこの地方の生産物や暮らしに関係したものが豊富に並べられており、見るだけでもワクワクして楽しい。直売所としては中規模といえようが、年間の来店客数は60万人弱、売上10億円超と、大規模施設以上の実績を誇る。祝祭日にとどまらず土日ともなれば駐車場には車があふれ、駐車場所を確保するためにずいぶん待たされることになる。

グリーンファームが生産者や地域住民、さらには東京をはじめとする遠隔地からの来訪者も含めて、圧倒的な支持を受けている理由は、上での紹介にとどまらず、まだいくつもがあるが、その中の一つが直売所と道

路をはさんだ向こう側に持つ家畜園である。けっこうな敷地に、鶏、アヒル、ヤギ、ウサギ等々、様々な家畜が飼育され販売もされている。これらの家畜が子どもたちに大人気で、いつもたくさんの子どもたちが目を輝かせて家畜と戯れている。ただ鶏を以前は抱くこともできたが、さすがに鳥インフルエンザの発生にともなって許可してもらえなくなったそうだ。

ここではヤギが販売されているだけでなくレンタルもしており、これが好評である。百数十頭のヤギが飼育され、かなりの頭数がレンタルされているようで、私が理事をしているフリーキッズ・ヴィレッジという山村留学等により「次世代の子どもたちの生きる力を育む」ことをねらいとするNPO法人もここからヤギを借りており、子どもたちのいい遊び相手になっている。レンタル期間は1日から半年の間。3か月の場合、レンタル料は3000円。労働力が不足する中、ヤギに雑草等を“舌刈り”してもらったり、景観の保持、昔飲んだ懐かしいヤギ乳を飲むため等、利用目的は多岐にわたるが、結婚式をはじめとして、イベントでのレンタル利用もけっこう多いらしい。

ところで担い手不足は深刻化する一方であり、今後ますます農地の有効利用が困難となり耕作放棄化していくことが懸念され、その対抗策として放牧を大々的に導入・普及させていくことが大課題である。一気での導入は困難であることから、大家畜＝牛による放牧という固定観念にとらわれず、状況・条件に応じてヤギをはじめとする中小家畜も利用していくことが望まれる。ヤギをとってみても、活用の仕方は多様でメリットも多い。レンタルヤギをはじめとしてグリーンファームに学ぶことは多く、たくさんのヒントを提供してくれる。

(農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷栄一)